

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第41集（2009年度）2010年3月発行：27-42

アメリカにおけるliberal educationとgeneral educationについて —歴史的な考察および最近の動き—

黄 福 涛

アメリカにおけるliberal educationとgeneral educationについて

—歴史的な考察および最近の動き—

黄 福 涛*

はじめに

周知の通り、リベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションはそれぞれ英語の liberal education と general education の片仮名の表記であるが、それらの漢字の表記はまだ完全に決まっていない。たとえば、liberal education という用語はよく自由教育や自由学芸教育と訳されているが、一般教養や教養教育という和訳もある。一方 general education の和訳は通常一般教育となっているが、普通教育というような表現もある。また、この二つの用語の異同についてアメリカを含めて多くの国々において必ずしも明確にされていない。しかし、liberal education と general education は世界の高等教育史上非常に重要な概念であり、今日においてもアメリカをはじめ多くの国々の学士課程カリキュラムの改革や人材育成などに大きな影響を及ぼし、また学士課程カリキュラムの質向上や大学改革の重要な対象と課題であるといえる。

戦後、アメリカのジェネラル・エデュケーション（一般教育）が日本の大学に導入されて以来、その理念や実践などに関して多くの研究成果が発表された。特に平成3年以降、大学設置基準の大綱化による学士課程カリキュラムの改革が行われていることに伴い、一般教育の見直しやリベラル・エデュケーションの意味、および新しく提唱された教養教育のあり方についてさまざまな視点から論じられている。たとえば、小林はリベラル・エデュケーションを自由教育とするのに対して、ジェネラル・エデュケーションを一般教育と訳している。また、教育理念としてのレベルではこの両者に本質的な違いはない。しかし、これが改革理念として現実的な提案や実践を導き制度化される時、両者間に違いがでてくると指摘している（小林、1997）。また、吉田はアメリカの教養教育、いわゆるリベラルアーツ教育のカリキュラムに焦点をあてて、現代のアメリカにおいては、リベラルアーツ教育は一般教育（general education）と混同され、リベラルアーツ教育に関する議論は、主に一般教育の課程を対象としてなされるのであるとまとめている（吉田、1998）。2005年に、吉田は日本との比較分析の視点から、アメリカの学士課程カリキュラムの構造と機能について考察する一方で、アメリカのリベラル・エデュケーションの歴史の変遷についても簡単に触れている（吉田、2005）。そのほか、館はリベラル・エデュケーションを人を偏狭な考えから自由にするという意味で使っている。それに対してアメリカにおけるジェネラル・エデュケーションは、スペシアル・エデュケーション、つまり専門教育に対置される普通教育の意味であると述べている（館、2004）。

*広島大学高等教育研究開発センター教授

筆者も以前、広義のカリキュラムの概念に基づいて大学カリキュラムに関する分析視点と研究フレームワークを取り上げてみた。つまり、カリキュラムに関する教育理念・目的、カリキュラム政策、高等教育の構造、各レベルにおける教育内容、組織、学生の受け入れ、カリキュラムの結果・効果を反映する卒業生の量と質も視野に入れ、多様な側面から分析する必要があると提唱している(黄, 2006, 2007)。

本稿では、以上の先行研究を踏まえて、主に理念や機関レベルにおけるカリキュラム、具体的な教育科目内容、教授法などの視点から、アメリカにおけるリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションという二つの概念について歴史的な変化を考察する一方で、それらの関係も明らかにすることを目的とする。具体的には、第一節では、ヨーロッパ由来のリベラル・エデュケーションの成立と導入について考察する。第二節では、アメリカのリベラル・エデュケーションの発足と変遷を取り上げる。第三節では、ジェネラル・エデュケーションの形成と展開について解説する。第四節では、リベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションに関する最近の結合の動きについて検討する。最後に、歴史的な視点から現在のアメリカにおけるこの二つの概念の使い方を比較しながら、それらの意味および相互関係を明らかにする。

1. ヨーロッパ由来のリベラル・エデュケーションの成立と導入

この概念の由来は紀元前5・4世紀のギリシアにおいて自由民(ラテン語でlibre)のための教育理念に遡ることができる。一般的に、当時の理念は精神と肉体が調和したエリート集団を育成するということであったが、最近の歴史研究の成果によると、当時の著述家たちはこのリベラル・エデュケーションについて共通の観念を持っていたわけではないし、それぞれ明確なカリキュラムを想定していたわけでもなく、各人の執筆動機、目的も異なっていたという学説もある。また、Artes liberalesという用語に古代で最初に出会うのは、キケロの初期の著作『構想論』においてであるから、Artes liberalesが用語として紀元前1世紀初頭において既に確立されていたことを示唆するものである。それに関連して、教育内容としての文法、修辞学、弁証法、算術、幾何、天文学、音楽といった「自由七科」が明確に成立されるのは紀元前1世紀の中頃である(小林, 2007)。また、古代ローマ時代の学者ワロ(Varro)は『自由学科Ⅸ』(Disciplinarum Libri II)の中で、当時の学校における教育内容について、文法、修辞学、弁証法、算術、幾何、天文学、音楽、医学と建築という科目を言及した。さらに、古代ローマの学者、マルティアヌス・カペラ(Martianus Capella, 365年?-440年?)は、自身が編集した百科全書の中で、はじめて「文法、修辞、弁証法、算術、数学、幾何、天文、音楽」を「リベラルアーツ」や「自由7科」(seven liberal arts)と定義した(Pedersen, 1977)。

この自由七科(Artes liberales)は12世紀以降のパリ大学を代表とするヨーロッパ大陸の中世大学において継承されたが、専門職教育科目(神学、法学、医学)の基礎科目へと発展され、神学や法学、医学などの専門学部への予備段階とするリベラルアーツ学部の中心科目となった。またその理念も特定の階層を対象に全人的教養人を目指すことではなく、あくまでも職業人を養成するための基礎教育と位置づけられていた。これに対して、12世紀後半頃のリベラル・エデュケーションの初

期形態の理念および内容は、パリ大学リベラルアーツ学部の学寮（カレッジ）を主なモデルとして成立したオックスフォード大学およびケンブリッジ大学において継承された。この二つの大学は国家の指導者として教養ある紳士を養成することを目標とし、大学の中にいくつかのカレッジが設置され、チューター制度に基づく古代のリベラル・エデュケーションの理念を堅持した。その教育内容については、自由七科を含む古典人文科学、たとえば古典語、古代文学、宗教、道徳、歴史、スポーツ、社交などが提供された。つまり古代ギリシャ時代におけるリベラル・エデュケーションの原始理念は、中世のイギリスの大学において人格形成や幅広い知識・能力を身につけることを目的とする国家指導者や紳士養成の教育へと発展した（皇，1970）。

1636年に設立されたハーバード大学（最初はハーバードカレッジと呼ばれた）はイギリスのオックスフォード大学をモデルに作られたが、そのカリキュラムは単に当時のイギリスの大学の授業科目をそのまま取り入れるだけではなく、一部の内容は14～16世紀西ヨーロッパに拡大したルネサンスによる教育への影響も受けた。たとえば、学生は第一、二学年においては主にラテン語やギリシャ語、ロジック、ヘブライ語および修辞学を履修し、第三、四学年においては、三つの哲学（自然、精神、倫理）以外に、地理、数学、歴史および植物学などの新しい近代的科目の勉強も始めた。最後の第四学年においては、再びラテン語、ギリシャ語、ロジックと自然哲学の復習が必要であった。その他、学生は四年間にわたり神学という科目を学習しなければならなかったという（Rudolph, 1977, p.31）。

その後、ウィリアム・メリーカレッジ（William and Mary College）やエール大学など、いわゆる植民地時代のアメリカの大学が次々と設立されたが、17世紀末まではハーバード大学と同様に聖職者や弁護士養成を教育目的とし、神学を中心としたカリキュラムの構造や内容などについて本質的な変化は起きていなかった。しかし、18世紀から産業化の進展と資本主義の発達を背景として、社会的ニーズに応え反古典的教育運動が躍進した。たとえば、1754年から1779年までの間、フィラデルフィアカレッジ（College of Philadelphia）の学長が伝統的内容と近代的科目を結合し、新しいカリキュラムを開発していた。具体的には以下のとおりである。

第一学年　クセノフォン（434?-355? B.C.ソクラテスのギリシャの将軍・歴史家）の著作と商人養成のための会計

第二学年　測量、地図作成とロジック

第三学年　地方語（vernacular）、農業と歴史

この新カリキュラムの開発について最も意義がある点としては、リベラル・エデュケーションにおいて宗教科目が従来のように中心的な役割を果たしたのではなく、学生が歴史などのコースを履修することを通して宗教教育を受けることが可能であったということである。したがって、このカリキュラムのデザインは「アメリカの歴史上、初めて中世伝統を守らず、また宗教を特別に教育の目的としている体系的大学教育内容の開発である」と評価されている（Rudolph, 1977, p.48）。

2. アメリカ的リベラル・エデュケーションの発足と変遷

19世紀中期に入ると新しく創立された大学だけではなく、植民地時代にすでに存在した一部の古いカレッジや大学も、実用性が高い人材育成のためにイギリスの古典大学に基づいた伝統的リベラル・エデュケーション理念を見直し、アメリカの産業化や社会変動に相応しい活動を行った。その結果としてのアメリカの専門教育（specialized education）が発足した。この時期に多くの大学でラテン語とギリシャ語の代わりに、フランス語やスペイン語、ドイツ語およびイタリア語が提供され、それと同時にイギリス文学、農業化学、工学、建築、理論と応用物理、アメリカ政治と宗教史およびアメリカ憲法などの科目も開設された（Rudolph, 1977, p.83）。一方で、19世紀以後急速に進んだ産業化や社会の近代化もアメリカの高等教育に対してさまざまな変化をもたらした。その背景として、1828年にエール大学は「エール報告」（The Yale Report of 1828）を公表した。アメリカの高等教育全体が新しい時代を迎えていた中で、エールのような伝統的カレッジにおいてはリベラル・エデュケーションの目的や、教育内容、教授法、および教育対象などのあり方について述べている。以下、この報告の趣旨を次のように要約する。

第一に、伝統的カレッジの教育目的は完全的で全面的な教育を行わず、むしろアーツとサイエンス（arts and science）を通じて上級の教育の基礎をしっかりと築くということである。具体的には、特定の専門教育（study of a profession）の予備段階として学生の知能の拡大とバランスを実現し、彼らにリベラル的・総合的視野を与え、バランスのとれた性格を訓練させることである。

第二に、以上の目的を実現するためにカレッジにおける学士教育段階では、専門教育科目（professional studies）を提供するのではなく、あくまでもすべての専門教育の共通となる学問のみ開設し、いわば特定の専門や職業に結び付かない教育しか実施していないということである。また、学生のバランスがとれた性格を養うために、アーツとサイエンスに関するさまざまな分野や科目内容のバランスをとることも必要である。たとえば、理論数学、物理、古代文学、英語文献読解、ロジックと精神哲学、修辞学と雄弁術の学習や、作文の練習、および事前準備なしのディスカッションへの参加などは不可欠である。商人や技師などの専門家の育成活動については、伝統的カレッジや大学において行われるのではなく、大学以外の現場において実施すべきとしている。たとえば、商人養成の教育活動は会計室で、機械技師の養成は工場で、農家の養成は田畑で進められるべきである。

第三に、これらの科目内容を必修とし、また主に講義と学生による暗唱という教授法を通じて授業を行うべきである。

第四に、この報告は植民地時代にヨーロッパの古典大学をモデルにして創立されたアメリカのカレッジや大学の改革や改善についても触れている。具体的には、今後アメリカの大学をさらに改善するために、ヨーロッパの大学に習うことは依然として重要である。しかし、ヨーロッパにおける大学や学校のすべてのことを区別せずに、盲目的に見習うのではなく、アメリカ固有の環境や特性を配慮し、慎重かつ適切に取り入れることが肝心である。

そのほか、この報告は基本的に社会のニーズに応えるため、教育対象を特定の階層や集団に限定

せず、ある程度伝統的カレッジの規模も拡大することに賛成する立場を表明している。しかし一方で、この報告は学校教育や専門・職業教育機関と同様に、学生募集基準を緩和すると教育の質が低下するという問題が生じることから、強く反対する意見もある。要するに、この報告からエールのような伝統的カレッジにおいては、やはり厳しい基準を定め、なるべく優秀な学生を選抜し中世のオックスフォード大学やハーバード大学などの古典大学の特徴を持ちながらエリート教育の理念を堅持すべきという主張が伺える。

以上で分析したことからわかるように、17世紀後半以後、ヨーロッパから伝わってきたリベラル・エデュケーションという概念は、アメリカの一部の伝統的カレッジにおいて依然として強い影響があったが、科学知識の発達や産業化および社会の近代化の進展に伴い、ヨーロッパ、特にイギリスのオックスフォード大学由来の古い理念を見直しつつある一方で、アメリカの環境や文化に対応しうるリベラル・エデュケーションという概念およびその具体像が次第に現れてきた。

3. ジェネラル・エデュケーションの形成と展開

アメリカの一部の学者はリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションを同じ意味で捉え、植民地時代に創立されたカレッジや大学において提供されたカリキュラムもジェネラル・エデュケーション・プログラム (general education program) だとみなしている。たとえば、レヴィン (Arthur Levin) は、ハーバードカレッジの例を取上げ、植民地時代のカレッジが当時のいろいろな分野にわたる知識を学生に提供し、学生が「幅」(breadth) と「深さ」(depth) のある知識を身につけさせることが可能であったと判断している。また、こうした教育内容が必修科目として開設され、すべての学生は履修しなければならなかったため、現在コア・ジェネラル・エデュケーション・プログラムと呼ばれるようになった (Levin, 1978)。しかし、筆者が調べた結果として、専門用語として「ジェネラル・エデュケーション」が初めて使われたのは1829年であるということである。レヴィンによると、当時パッカード (A. S. Packard) という人物が *North American Review* という雑誌に論文を掲載し、所属機関のカリキュラムを紹介したうえで、この用語の使用を始めた。以来、「ジェネラル・エデュケーション」というタームが正式に登場した。1892年に成立したシカゴ大学の初級カレッジ (Junior College) とその後のミネソタ大学のジェネラル・カレッジ (general college) は、初めてジェネラル・エデュケーションを大学の教育目標として掲げた (Ratcliff, 1997)。

20世紀前半までは、アメリカの多くの大学ではジェネラル・エデュケーションに関するさまざまな改革の試みが実施されていた。たとえば、1869年にハーバード大学ではドイツの研究大学における「教授の自由」と「学習の自由」の影響も受けながら、「自由選択」(free elective) 制が導入された。学生が自分の興味により、基本的にすべての科目を自由に選択し習得できた。しかし一方で、学生が集中的に専門科目を履修し、また基礎科目から上級科目への連続性を十分に重視しなかったなどの問題で、1909年にハーバード大学では、自由選択制を見直し、「配分必修」(distribution requirement) という新しい単位履修制度が実施された。この制度は学生の専攻 (major) 以外に全

学共通科目と見られる特定の領域やコースグループから規定の単位履修を要求している。植民地時代のコア・プログラムと比べて学生に多くの自由選択科目が与えられると同時に、大学側に開設された必修科目数も少なくなったという。1919年にコロンビア大学では、新入生向けの「現代文明論」(contemporary civilization)という入門プログラムが編成された。このプログラムには倫理やロジック、歴史、経済、法律、管理、社会学、生物学および芸術などの幅広い分野にわたる科目が含まれていた。こうした科目は主として大学教育における上級の教育への入門教育として開発されたが、人類文明に関する事実や知的方法論の説明などの内容もあり、リベラル・エデュケーションの一環として学生に提供された。

1930年代初期、シカゴ大学のハッチンズ(Hutchins R. M., 1899-1977)学長が開発した「グレイト・ブックス」(Great Books)を中心としたジェネラル・エデュケーション・プログラムが当時のアメリカ大学教育に大きな影響を与えた。この「グレイト・ブックス」は、古代から当時にかけての西洋世界において最も影響力を持った教育思想家に限らず、権威ある思想家をもカバーしており、教育思想とその目的に関する広範囲な分野にわたる約100の著作や論文を収録していた。ハッチンズは古典的リベラル・エデュケーションの理念に従って、こうした著作や論文をリベラル・エデュケーションの共通テキストとして、特に学生の知的訓練や真理の探求のために使用されるべきだと主張した。彼は学生を中心とする教育活動や学習活動に反対し、教員のリーダーシップのもとで、これらに関する教育活動をコア・プログラムの一環としてセミナー形式で実施すべきだと強調している。また教育対象については、ハッチンズは従来のようにリベラル・エデュケーションは本来エリート階層の育成を目的とし、特定の宗派のカレッジにおいて小規模人数の教育を薦めている。少数の厳選された学生がこのプログラムを履修した後、研究大学に進学し、形而上学や社会科学および科学などの基礎学問の中の専門(specialization)を勉強し、また一部の学生は技術機関に入って専門職の訓練を受けるべきだと提案している(Hutchins, 1968)。

20世紀前半までは以上のように機関レベルにおいてのみジェネラル・エデュケーションカリキュラムやプログラムの改革が実施されたが、ジェネラル・エデュケーションの理論や理念について体系的に論じたのは、1945年ハーバード大学委員会報告書『自由社会における一般教育』(*General Education in a Free Society*)である。この報告書の出版を契機に、ジェネラル・エデュケーションの理論が正式に出来上がり、特に第二次世界大戦以後アメリカの政治的、経済的、文化的な影響が世界的に強まるのに伴い、日本を含む世界の多くの国々にその理論が広がりつつある。以下、関連文献に基づきこの報告が議論したジェネラル・エデュケーションの概念についてまとめてみる(Harvard Committee, 1945)。

第一に、この報告でアメリカの植民地時代から20世紀前半までの教育が基本的にはキリスト市民(Christian citizen)を育成する教育であったと指摘している。また、こうした市民の育成を実現するために、主に数学、ギリシャ語やラテン語の古典作品、修辭、およびキリスト倫理観などの教育内容が開設されたと論じている。

第二に、この報告書では当時のアメリカの高等教育をジェネラル・エデュケーションとスペシャル・エデュケーション(special education)に分けており、両者の違いが教育内容ではなく教授法で

あるとの見解は不適切であると指摘している。ジェネラル・エデュケーションとは、曖昧で中立の概念であるが、世間一般の知識の中の絵空事のような教育でもないし、すべての人々のための普遍的な教育でもないということである。これは学生の全人教育（whole education）の一部であり、この全人教育というものは責任がある人間および市民にとって一生で最も重要な教育であるという。

第三に、この報告ではリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションの関係についても整理している。それによると両者がほぼ同様な意味を持っており、同じルーツのリベラル・アーツにより、自由人（free men）の育成を目指すという点について両方の目標が一致するが、ジェネラル・エデュケーションはより多くの学生に提供される教育であるのに対して、リベラル・エデュケーションはごく一部の人々に限定されているということである。つまり、現代の民衆主義国家は古代のリベラル・エデュケーションの理念の一部を保ったまま、教育対象に関してはより多くの民衆に全人教育を行うということである。

最後に、この報告書ではジェネラル・エデュケーションの目標とは全人の開発（development of whole men）であり、また学生に批判力のセンスを磨かせることを通じてすべての分野に関するコンピテンスを身につけさせることにより、学生の思考力、コミュニケーション能力、適切な判断力、異なる価値観の判別力などの具体的な能力を養う必要があると強調している。

ここで強調しておきたいことは、特に教育目標について、リベラル、ジェネラル双方に一部共通の認識を有するとの指摘もあるが、体系的にはジェネラル・エデュケーションの教育目標や、教育内容、実施方法などについて論じていることである。

4. リベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションの結合

第二次世界大戦以後、特に1960年代から始まった大学の急速な規模の拡大に伴った学生の多様化により、特定の階層や社会的エリート集団に限られたリベラル・エデュケーションの理念やそのカリキュラムなどに対して、新たな改革が求められるようになった。一方で、1945年のハーバード大学の報告に描かれた「ジェネラル・エデュケーション」の理念や実施方策などもほぼ同様な課題に直面していた。その結果として、この二つの用語が区別されずに同じ意味で使われるようになっただけでなく、理念レベルにおいても機関レベルにおいてもこの二つの教育モデルは同じ方向で変化を遂げており、両者を統合するような傾向がみられる。以下、1960年代以降、この二つの教育モデルに関するそれぞれの具体的な変化、特に最近の動向を考察する。

4.1 リベラル・エデュケーションの変化

ドレッセル（Paul L. Dressel）は1968年に出版された『カレッジと大学のカリキュラム』（*College and University Curriculum*）という本の中で、1950年代後半から1960年代までのアメリカの大学におけるリベラル・エデュケーションの改革について整理している（Dressel, 1968）。彼によると、機関レベルにおけるリベラル・プログラムに関する大きな変化として、以下のような二つの側面が見られる。

第一に、幅広いプログラム（broad programs）の開発である。具体的には、

- ① 学生による自主的な学習プログラムや教授法の開発である。たとえば、教員の指導のもとで学生が指定された文献を読んだり課題研究を行ったりしたうえで、口頭発表や作文能力、問題探求力および解決力を向上させることを目的としている。
- ② 異なった分野や背景を持った学生が集まり、統合的なセミナー（integrative seminar）を設けることである。この方式を通じて、学生が学問の「幅」と「深さ」を体験するだけでなく、専攻による学問の細分化を統合することも可能である。
- ③ 学習環境を醸成することである。基本的には、物理的な環境の改善や学術プログラムの開発を通じて、学生に知識の一貫性（coherence）や統合性（unity）を把握させることを目的としている。たとえば、異なった文化背景の学生が同じ宿舎に住むことや、学生と教職員や大学の管理者などとコミュニケーションできる共同体を構築することなどである。
- ④ 海外短期留学や体験学習研修である。

第二に、仕事とサービスの経験（work and service experience）を身につけさせることである。具体的には、

- ① 仕事と大学での勉強を結ぶことができるプログラムの開発である。たとえば、学生が短期間企業や工場、および政府機関で見学したりすることを通じて新しい環境に慣れたり、自分の学習内容に役に立つことを習ったりすることを目的としている。
- ② 社会的、特に地域社会的な経験を蓄積することである。学生が在学したまま、あるいは夏休みなどを利用して地域住民を手伝ったり、地元の学校教育現場で相談員を務めたり、あるいは地域の企業や政府機関のプロジェクトなどに参加したりすることである。

1970年代後半から財政の悪化により大学運営の効率化を求める声が高まった。これにより、一部の小規模なカレッジや大学において新入生の定員を確保するため、リベラル・プログラムを見直したり、その科目数を減らしたりする改革が行われた。その結果、社会的変動や地域発展に対応する実用性の高い内容がリベラル・エデュケーションに導入され、リベラル・エデュケーションが次第に「象牙の塔」から脱出し、「実践的」（practical）内容を取り入れるようになった。アメリカの学者スコット（Barbara Ann Scot）が指摘しているように、「この変化は各カレッジの管理者を中心とした自発的な努力がもたらしたものである。その目的は、リベラルアーツを救い、また学生にこうした科目への関心を高めさせる一方で、入学者数も増やすことである。たとえば、イリノイ州のある小規模なリベラルカレッジでは、そのリベラル・アーツ・カリキュラムのトップにビジネス準備プログラムが付け加えられた…私立のエリート大学以外に、従来のように開設されたリベラルアーツがほとんど存在していない」ということである（Scot, 1995）。

1990年代までは、リベラル・エデュケーションに関する改革が、単に一部の内容の見直しやその科目数の減少に限らず、その全体構造や教員と学生との関係および教授法などにおいても著しい変化が起きていた。たとえば、シュナイダー（Carol Schneider）とショーエンバーグ（Robert Shoenberg）両氏によると、こうした動きと傾向について、次のようにまとめることができる。具体的には、① 知的スキルや能力の獲得、② 多様な知識探求モードの理解、③ 社会的、市民的、グローバルな知識

の開発, ④自己認識と基礎知識の獲得, ⑤学問の集中と統合である。

教員と学生の関係について, 教員は従来のように権威ある立場から講義や小規模のグループディスカッションを通じて一方的に学生に対して知識を詰め込む立場から, 次第に学生の学習活動にアドバイスを与え, ガイドという新しい役割を果たす立場へと移行しつつある。教授法の改善について最も革新的な変化として, コンピューター技術に基づき学生や学習者を中心とする教授法の開発が挙げられる (Schneider and Shoenberg, 1998)。

4.2 ジェネラル・エデュケーションの変化

2000年に, ガーフ (Jerry Gaff) は全米カレッジ・ユニバーシティ協会 (The Association of American Colleges and Universities: AAC&U) が学士号を授与する567の高等教育機関を対象に実施されたアンケート調査結果および独自の訪問調査に基づき, 1980年代から1990年代までのアメリカのジェネラル・エデュケーション・カリキュラムに関する改革が, 特に次の13の側面に焦点をあてて行われていたと指摘している (Gaff, 2003)。

第一に, リベラルアーツとサイエンスがジェネラル・エデュケーションの中により著しく位置付けられるようになっただけでなく, 専門職教育 (professional education) においても昔より重視されるようになったため, ジェネラル・エデュケーションと専門職教育の間により密接なつながりや接続ができたことである。

第二に, 作文や会話の能力, 論理的で批判的な思考力, 外国語能力, 数学, コンピューターなどの能力を中心とする基本的スキルの点である。

第三に, 学生の募集や卒業条件に関してより厳しい基準が設けられたことである。

第四に, 配分必修科目数が減る一方で, 全学レベルにおける必修科目が増えたことにより, カリキュラムの構造化に努め, 学生に最低の学術基準を満たさせようとするものである。

第五に, 一年次教育の改善である。従来のやり方と異なり, 新入生の素質や知的能力を高めさせ, テーマ別のセミナーやオリエンテーションなどを通じて, 彼らを順調に上級の教育段階に進めさせるよう支援することである。

第六に, 高年次教育である。具体的には, 研究プロジェクトや, 作品の創作, インターンシップなどを通じて, 学生が習ったことを応用し, また自分の能力を発揮できる環境や機会を提供することである。

第七に, グローバルな学習内容の充実である。学生に異文化や西洋と非西洋の事情と知識を身につけさせることである。

第八に, アメリカと西洋伝統における人種や階層, ジェンダーに関する問題をコア・カリキュラムとして提供することである。

第九に, テーマ別や学際的なプログラムの開発である。

第十に, 専門的倫理や, 社会問題, 科学と技術の進歩による社会への影響などの学習を通じて, 学生の価値観に関する教育の実施である。

第十一に, 四年間にわたるジェネラル・エデュケーションの実施である。

第十二に、学生による自主学習の強調である。

第十三に、学生の学習成果に対して評価を実施し、教育の改善を求めることである。

また、AAC&Uのもとで2008年11月から2009年2月まで大学の教育担当者やその代表者433名を対象に行われた全国調査の結果によると、過去5年間それぞれの大学におけるジェネラル・エデュケーション・プログラムのパターンについて、その開設科目数の多い順にみると、グローバル的なコース（60%）、一年次セミナー（58%）、多様化したコース（56%）と学際的なコース（51%）であった。履修方式については、80%以上の機関では配分必修が実施されたが、わずか15%の機関でしかこの方式を利用していなかった。ほとんどの機関ではそれ以外に、共通知的体験（common intellectual experiences）（41%）、テーマ別必修コース（thematic required courses）（36%）、上級レベルの必修要件（upper-level requirements）（33%）、コア・カリキュラム（core curriculum）（30%）および学習共同体（learning community）（24%）などの方式も併用された（AAC&U, 2009）。

個別の機関をみると、ジェネラル・エデュケーションに関する新しい改革の動きがでてきた。たとえば、最近ハーバード大学ではジェネラル・エデュケーションに関する改革が行われたばかりで次のように四つの目標が立てられている（Harvard University, 2009）。

第一に、学生に市民活動への参加を準備させること。

第二に、学生自身が芸術、アイデア、さまざまな価値観の伝統的産物であり継承者であることを教えること。

第三に、学生が変化に対して批判的かつ建設的に対応できること。

第四に、学生が自分の言動による倫理的な結果の重要性を理解する能力を開発すること。

以上の目標を達成するために、ハーバード大学では次のようなプログラムが編成された。具体的には、①美学と解釈的な理解（aesthetical and interpretive understanding）、②文化と信念（culture and belief）、③経験的と数学的な論証（empirical and mathematical reasoning）、④倫理的な論証（ethical reasoning）、⑤生活システムの科学（science of living systems）、⑥物理宇宙の科学（science of physical universe）、⑦世界の社会（societies of the world）、⑧世界の中のアメリカ（the United States in the world）に関するプログラムである。

履修方式としては、長年実施されたコア・プログラムという方式から配分必修制への転換が実現された。つまり、学生に八種類のプログラムの中から、それぞれ何科目かを履修することを要求するものである。

2009年9月に筆者はAAC&U前副会長ガーフ（Jerry Gaff）と面会し、現在のアメリカにおけるリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションとの関係についてインタビューを行った。氏によると、リベラル・エデュケーションという概念はジェネラル・エデュケーションという概念よりはるかに古いものであるが、最近アメリカにおいても非常に混同されやすい表現で、それぞれのキャンパスにおいてどちらも使われているのが現状である。氏は歴史上、この二つの概念にはその教育目的や教育対象、カリキュラムの内容などの点で明確な違いがある。しかし、特に21世紀に入って、学生に将来、複雑かつ多様化した、また変動しつつある社会に出る準備として、科学や文化、社会に関する幅広い知識を提供し、特定の領域（a specific area of interest）における深い知

識も教える点では共通する。またリベラル・エデュケーションもジェネラル・エデュケーションと同様に、社会的責任感や移転可能な（transferable）知的で実践的なスキルを学生に修得させるのに役立つと期待されている。こうしたスキルにはコミュニケーション能力や、分析力、問題解決力、現場や実社会で知識とスキルを応用する能力が含まれていると述べている（Gaff, 2009）。

近年来、一部の学者や大学関係者、専門職団体はリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションという二つの用語を区別して使っているにもかかわらず、前述したように、特に1980年代以後、理念的なレベルに限らず、そのプログラムのレベルにおいても、第二次世界大戦前と19世紀以前のそれと比較すると、両者には明らかに多くの共通点がみられ、多くの場合は同様な概念として使われるようになったと思われる。

まとめ

以上の分析から、アメリカにおいてリベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションに関する歴史的な変化はおよそ三つの段階に分けることができ、またそれぞれの段階における特徴について次のようにまとめられる。

第一段階では、1636年に創立されたハーバード大学はイギリスのオックスフォード大学をモデルとし、古代ギリシャにおいて初めて誕生したリベラル・エデュケーションの概念をアメリカに導入した。18世紀後半まではその理念は聖職者や弁護士を中心とした特定の階層を養成することであった。また教育対象はごく一部の階層や集団に限定されていた。そのカリキュラムについては、ギリシャ語やラテン語、哲学、文法、修辞学、歴史などの内容以外に、物理学や数学に代表される一部の近代的なものも提供されたが、あくまでもヨーロッパの文明や学問を中心としたカリキュラムのもとで、学生全員に厳密に構成された同一内容の履修を強制するものであった。その教授法も従来のもものと基本的に変わりがなく、教員による講義と学生の暗唱というやりかたが主流であった。

第二段階では、19世紀に入って特に19世紀中期からアメリカの産業化の進展に伴い、ヨーロッパから輸入してきたリベラル・エデュケーションの概念はアメリカにおいて次第に本土化された。たとえばその理念は、聖職者や弁護士のみの育成を目的としたものから学生の知能の拡大やバランスのとれた性格を養うことへと転換されつつあった。それと同時に教育対象も拡大された。また、カリキュラムにおいてもっとも大きな変化としては、リベラル・エデュケーションは多くの独立したカレッジにおける一つの完結された教育から総合大学や大規模な大学における上級の専門教育への準備教育と位置づけられたため、伝統的古典作品の一部が残っていたものの、アーツとサイエンスに関する幅広い近代的な内容がますます重要になった点が挙げられる。講義や暗唱などの伝統的教授法が依然として重要な手段として用いられたが、自由選択制や配分必修制などの新しい履修方式が導入されたことから、昔と比べて学生はより自由に学習できるようになった。

他方、この時期にはジェネラル・エデュケーションという用語も登場し、また一部の機関においてはそれに関連した教育改革の試みも実施された。しかし、理論的なレベルにおいてジェネラル・エデュケーションの具体像が明らかにされていなかったため、この概念はアメリカの大学教育に対

して戦後ほど大きな影響を与えなかったと考えられる。

第三段階では、戦後の初期、1945年のハーバード大学の報告で示したように、当時のジェネラル・エデュケーションという概念は、アメリカのような自由社会において責任ある市民の育成を目指すということである。これは自由人の育成を目指すリベラル・エデュケーションと異なっていたといえるだろう。しかし、1960年代から本格的に始まった大学の大衆化以後、特に1980年代後半以降リベラル・エデュケーションとジェネラル・エデュケーションに関する改革は、ほぼ同様な方向で進められる傾向がみられる。その結果、教育理念の転換やプログラムの開発および教授法の革新などの側面からみると、ますます多くの共通点がみられるようになった。実際その教育目標は、従来のように学生に幅広い知識を身につけさせるという側面がある一方で、学生に知的スキルや批判的な思考力、知識の応用力、問題の解決力を獲得させることに、より重点が置かれている。また、教育や学習活動は、異民族の文化・文明や海外事情に主眼をおくグローバルなプログラムやコースの導入を通して、ヨーロッパ地域やアメリカという西洋の次元を乗り越えて、国際的・グローバルな次元に進んできた。ここで言及しておきたいのは、教授法が多様化しつつあり、特に学生を中心に置いて、彼らによる自主的な学習をもっとも重視するようになったということである。

要するに、現在アメリカにおいてliberal educationとgeneral educationという二つの用語が存在し、また各機関においてリベラル・エデュケーションやジェネラル・エデュケーションに関する理念の定義やカリキュラムの編成、および教授法の採用などについて、依然として多様な面がある。しかし、これらは従来、単に理念レベルにおいてのみ多くの共通点がみられていたが、機関レベルにおけるカリキュラムや、具体的な教育科目内容、教授法などの側面においても、次第に同様な方向へ向かって変化しているため、同義語として用いられているようである。

【参考文献】

- 黄福涛（2007）「大学教育理念と学士課程カリキュラムの改革—歴史的・比較的視点から—」『大学論集』第38集，広島大学高等教育研究開発センター，125-141頁。
- 黄福涛（2008）「大学カリキュラムの分析枠組み—カリキュラム研究の展開を手掛かりとして—」『大学論集』第39集，広島大学高等教育研究開発センター，15-31頁。
- 小林哲也（1997）「一般教育概念の国際比較」一般教育学会編『大学教育研究の課題』，玉川大学出版部，93-100頁。
- 小林雅夫（2007）「ローマ・ヒューマニズムの成立」『地中海研究所紀要』第5号，早稲田大学地中海研究所，1-10頁。
- 皇至道（1970）『大学の歴史と改革』講談社。
- 館昭（2004）「教養教育論議から自由学芸教育の確立へ」『高等教育研究紀要』第19号（高等教育の展望と課題），財団法人高等教育研究所，225-232頁。
- 吉田文（1998）「教養教育のカリキュラムとは何か—アメリカの場合—」有本章編『教養的教育からみた学部教育改革』（高等教育研究叢書48），広島大学大学教育研究センター，28-38頁。

- 吉田文 (2005) 「アメリカの学士課程カリキュラムの構造と機能—日本との比較分析の視点から—」
日本高等教育学会編『高等教育研究』第8集, 71-93頁。
- AAC&U (2009). *Trends and Emerging Practices in General Education: Based on a Survey Among Members of the Association of American Colleges and Universities Conducted by Hart Research Associates*. Washington, DC: Hart Research Associates.
- Dressel, P. L. (1968). *College and University Curriculum*. McCutchan Publishing Corporation.
- Gaff J. G. (2003). *Handout on Curriculum Trends*. Presented at Kutztown University of Pennsylvania, October 1-8.
- Harvard Committee (1945). Theory of General Education. *General Education in a Free Society* (pp.105-121). Harvard University Press.
- Harvard University (2009). <http://www.generaleducation.fas.harvard.edu/> 2009年9月17日アクセス。
- Hutchins, R. M. (1968). *The Learning Society*. New York: Mentor.
- Levine, A. (1978). *Handbook on Undergraduate Curriculum*. Jossey-Bass Publishers.
- Pedersen, O. (1977). *The First Universities*. English translation by Richard North. Cambridge University Press.
- Ratcliff, J. L. (1997). Quality and Coherence in General Education. In J. G. Gaff, J. L. Ratcliff & Associates (Eds.), *Handbook of the Undergraduate Curriculum* (pp.141-169). Jossey-Bass Publishers.
- Rudolph, F. (1977). *Curriculum: A History of the American Undergraduate Course of Study Since 1636*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Schneider C., & Shoenberg, R. (1998). Contemporary Understandings of Liberal Education. *Liberal Education*, 84(2), 32-37.
- Scot, B. A. (1995). The “New Practicality” Revisited: Changes in the American College Curriculum. In C. F. Conrad & J. G. Haworth (Eds.), *Revisioning Curriculum in the Higher Education* (pp.140-150). Needham Hts., MA: Simon & Schuster Custom Publishing.
- Tomas. R. (1962). *The Search for a Common learning: General Education, 1800-1960*. New York: McGraw-Hill.

Liberal and General Education in the United States: a historical analysis and recent trends

Futao HUANG*

This paper is mainly concerned with the changes in liberal and general education in the US from a historical perspective and their recent trends. The paper starts with a brief review of existing major research achievements in this field, including the emergence of the term liberal education and its earliest meaning in the ancient Greece and Roman Eras. The second section discusses how the European term liberal education was introduced in US higher education institutions in the 17th century and what changes had happened to it by the 19th century. The third section makes an analysis of the meaning of the term general education which has been widely used since 1945. The fourth section touches on recent trends in the use of the two terms at both policy and institutional levels. The paper concludes by arguing that by the 19th century, nearly 150 years after term liberal education was exported from the University of Oxford to the US, considerable changes had happened to it, resulting in clear American characteristics. By the early 1950s, clear differences had emerged in the ideals and program developments between the two terms. But since the 1980s, the two concepts have come to share more and more similarities even at a practical level. In a major sense, currently they can be considered as two interchangeable terms.

* Professor, R.I.H.E., Hiroshima University